

## 「2013年度土木学会全国大会サマージンポジウム 若手技術者国際ワークショップ」開催報告

飯島 怜 (東京大学大学院工学系研究科)  
山下 優輔 (名古屋大学 工学部)

2013年度全国大会において、  
「Your Career as a Civil Engineer  
and Our Future Society」のタイト  
ルのもと、40年後の社会に向けて土  
木が取り組むべき課題を探り、将来  
のキャリアパスや社会貢献に関して  
考える若手技術者国際ワークショッ  
プが開催された。様々な国籍やパッ  
クグラウンドを持つ33名の若手技術

### 若手技術者国際ワークショップ

開催日時：2013年9月5日(木)  
開催場所：日本大学生産工学部津田沼キャンパス

土木学会全国大会では毎年、留学生・外国人技術者を主な対象としたサマージンポジウムが開催されている。2013年度は、土木学会が創立100周年を迎えるにあたり取り組まれている土木学会100周年事業の一環として、新たに、サマージンポジウム参加者を中心とした若手技術者による英語でのワークショップが開催された。

者により、多様な視点からの議論と  
交流が行われた。

### 日本の土木工学 — 今こそ日本で働くチャンス

開会式では、土木学会100周年  
事業実行委員長である藤野陽三教授  
(東京大学)から開会の辞をいただき、  
工学分野の変遷や土木学会の歴史な  
ど、日本における土木工学の紹介が  
あった。続いて行われた招待講演で  
は、Phan Huu Duy Quoc 博士(清水  
建設、ベトナム出身)が登壇し、ご自  
身の日本での経験や、技術を媒介と  
したベトナムと日本の交流に関して  
語られた。ベトナムは若年層が多く  
エネルギーで満ちている一方で日本  
は技術経験が豊富である、日本で少  
子化が進んでいる今こそ、日本で働



写真1 グループディスカッションの様子

くチャンスである、と留学生・外国  
人技術者たちに投げかけた。

### 40年後の土木工学に 求められるものとは

ワークショップは6グループ編成  
で行われ、各グループは、ファシリ  
テーター1名と国籍や現所属を勘案し  
た約6名の若手技術者で構成された。  
参加者には事前に質問表が配布され、  
①40年後を予想した際に理想的な未  
来の社会とは何か、②理想的な未来  
の社会を実現するために土木技術者  
が取り組むべき課題と必要とされる  
行動は何か、③理想的な未来の社会  
の実現に向けて土木技術者としてど



写真2 1分間プレゼンテーションの様子

のように関わり貢献したいか、の三  
つの問いへの回答が求められていた。

グループワーク最初のブレインス  
トミーニングでは、40年後の土木の姿  
や40年後に土木工学が取り組むべき  
課題について、各自付箋紙にリスト  
アップした後、自己紹介と併せて1分  
間の口頭発表をグループ内で行った。  
人口増減や都市・交通の変化をはじめ  
め、技術革新、自然環境等に関して多  
様な意見が挙げられた。次に、班員で  
共有したさまざまな課題をいくつか  
の系統に分類し、グループごとにキー  
ワードを選んでグループディスカッ  
ションを行った。選ばれたキーワー  
ドは、人材育成や持続性、発展、維持、

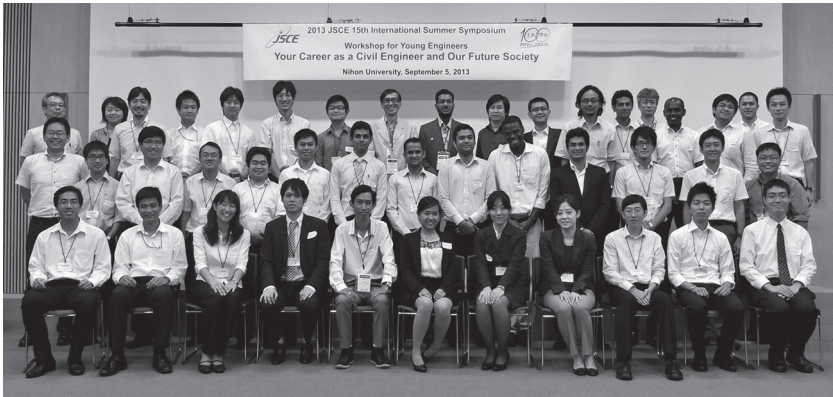


写真3 集合写真

自然、技術、リスクと幅広く、グループによって話の展開も異なった。続いて、グループディスカッションをふまえて各自考えを深め、土木技術者としての将来の夢を一人ひとりポスターに表現し、それをを用いてひとりずつ全参加者の前で1分間プレゼンテーションを行った。40年後の土木工学の課題やそれらへの関わり

り方に対する考えは、共通な部分がありながらも33人皆違い、教授になった自分を想定したり、社会の構図をふまえて自らの立ち位置を示したりするなど、ユニークな発表も展開された。発表後にはポスターを壁に展示し、自由に意見交換する時間が設けられた。参加者それぞれが思い思いの絵やグラフ、配色によって考えを表現したポスターが並んだ。また、発表やポスターをきっかけに、他グループのメンバーとも積極的に交流する様子が見られた。

### 「専門外の仕事」と 言わない土木技術者

約4時間にわたる議論等を終え、本ワークショップ実行委員長の石田哲也教授（東京大学）による閉会式が行われた。40年前の1973年、現在のような社会を想像したものがどれほどいただろうか。40年後を推測することは容易ではなく、土木工学がどのようなものか、あるいは、なるべきかについて知る者はいない。だが、これだけは言える、何か起きたときに「これは自分の専門外の仕事

だ」と言わないことが土木技術者の理想像である、という熱いメッセージで締めくくられた。

参加者からは、「将来を考える良い機会になった」、「他大学の留学生と交流できて良かった」といった好評な意見が多数寄せられた。なお、創立100周年を迎える2014年度の土木学会全国大会では、本年度のワークショップを拡大し、国内外の若手技術者・学生を一堂に集めた国際ワークショップが開催される予定である。ますます盛況したワークショップになることが期待される。

### 取材を終えて

日本の新規インフラは減少しており海外進出の時代である、そう思ってきたので、日本の少子化が外国人にとって日本で働くチャンスである、という考え方が新鮮だった。さまざまなバックグラウンドを持つ若手技術者同士が国際的に交流することは、技術の授受にとどまらず、広い視野をもつ技術者の育成、および、それに伴う土木工学の発展につながっていくのだからと改めて感じさせられた。